

私が河童に興味を持つようになったのは、大学時代からの共通の友人N氏の住む、福岡県久留米市田主丸と、S氏の住む、茨城県小美玉市小川が共に河童の里であった事に由来します。

その後、各地の伝承や文献などに当たっていくうち、「河童」というモノの社会的存在について、スサノオノミコトに代表される政治的敗者や、被差別階級との関連に目がいくようになりました。

以下に、田主丸編・茨城編から稿を起こし、その内容に関して述べてみたいと思います。

河童は水辺の怪として、様々な呼称で全国に分布しています。

それぞれに特徴もありますが、一般的な共通点として、

- ◎小童のような姿 ◎頭の皿 ◎甲羅 ◎相撲好き ◎好色 ◎土木工事をする
- ◎きゅうりを好む ◎薬をもたらず ◎金気を嫌う ◎尻子玉をぬく ◎手が抜ける
- ◎馬を河中に引き込む ◎詫び証文を書く ◎膳椀を貸す などがあげられます。

また、川で泳ぐものを引きこむ（特に牛頭天王の祭礼の日にみだりに河で遊ぶものに祟る）といわれています。

一方の素戔鳴命（スサノオノミコト）は、日神（アマテラス）と月神（ツクヨミ）の弟神であり、海と冥界の主であり、さらに天界を追放された神です。

その後スサノオは出雲に下りてヤマタノオロチを退治し、その体内から剣を得ました。国造りの神オオクニヌシの先祖にあたります。

また、仏教と融合し牛頭天王と同一と考えられています。八坂神社（祇園社）に祭られ、疫病の災いをさける蘇民将來說話の神でもあります。

田主丸編

J Rの駅舎が河童の顔を模しているユニークなまち、久留米市田主丸。

「田主丸」という地名は南北朝時代から見え、「田の主」という瑞祥地名か、とあります。マルはハル（墾）の転意で九州に多いと市町村名語源辞典にあります。

しかし、「田主」とは同時に案山子（かかし）のことでもあるようです。

「かかし」は田の神の依代（よりしろ）であり、山の神の権現です。

「かかし」については古事記に不思議な話が載っています。オオクニヌシと一緒に国づくりをしたスクナビコナという小さな神様が、海の向こうからやって来た時に、だれもその名前を知らませんでした。しかし、クエビコという神がその名を知っているはずだ、とヒキガエルがいい、果たしてその通りでした。クエビコは歩くことはできないが、何でも

知っている神であり、これが今（古事記編纂の時代）に「山田のそぼづ（かかし）」といわれるものであると。

オオクニヌシとスクナビコナは後に天つ神タケミカズチによって征服される側の神であり、両者ともに医薬の神です。オオクニヌシは因幡の白ウサギに治療を教えた神です。

「かかし」との仲介をしたのはヒキガエル。蛙です。蛙は古語で「カワズ」。すなわち河衆（河の民）です。蛙はこの後も、全国の子孫族に滅ぼされた神々の周辺に現れます。

一本足の案山子は田を守り、収穫がすむと山に帰ります。このとき収穫に感謝し、案山子を送る祭礼が農村で行われます。

この饗宴に際し、必要な膳や椀何人前と書いた紙を洞なり淵なりに投げ込んでおくと翌日には河童が注文通りそろえてくれるという話が伝わっています。

このとき、その宴の正客は水の精霊であり、「役を終えた案山子」であると、折口信夫が「河童の話」というテキストで述べています。

この春に山から下りて農作し、冬に山に入るといふのは、砂鉄を採取し鉄を作る「産鉄民」を象徴しているともいわれます。古代に砂鉄を精錬する技術者は四日四晩炉の火を覗き、片足でふいごを踏み続けるため、目を病み、歩けなくなるものが多かったといわれています。「かかし」は河の衆の神であると同時に山の民の神でもあるのです。

スサノオのヤマタノオロチ退治伝説は鉾山支配の象徴という説があります。伝説の舞台は現在の島根県の斐伊川周辺とされていますが、ここは上流に豊かな産鉄地があります。

また、退治した大蛇の尾から剣を得たというモチーフは製鉄民に権力を持っていたとも考えられ、製鉄民の神＝案山子＝河童と符合します。

筑後地方には、河童は春の彼岸に川に入り、秋の彼岸に山に上がるという言い伝えがあり、これも案山子と一致します。

おなじく田主は田螺（タニシ）でもあります。

藻や微生物を食べ田の水を浄化する田螺も田の守り神、水神の使わしめなのです。さらに食用すると眼病に効果があるとされ、さらに不思議なことに防火、火災除けの信仰もあります。東京の錦糸町には火事の時ぞろぞろと堀から上がり、水を吹きかけて火を消した田螺を祭る田螺稲荷というものがあります。

また、全国の薬科大・薬学部に伝わる「田螺殿の歌」という奇妙な俗謡があります。（詳細は後述）

「田螺殿、田螺殿、愛宕参りにおじゃらぬか。いやで候、いやで候（後略）」

愛宕参りとは京都の愛宕酸参拝で防火祈願です。祭神はカグツチという火の神です。

田主丸は案山子と田螺と河童が作った村のようです。

その田主丸の河童の一種「川ン殿」は素戔鳴（スサノオ）神社に祭られ、同じく、月読

神社内の馬場瀬神社に祭られている河童「荒五郎大明神」は「罔象女（モウショウメ）」という神と一緒に祭られています。

このモウショウメは水神であり、書記によると愛宕山の神カグツチが死んだ時に生まれた神とも、カグツチの小便から生まれた神ともいわれています。

「かかし」は蓑と笠をつけています。童謡「案山子」にも「天気も良いのに蓑笠つけて」と歌われています。しかし、この蓑笠こそがスサノオが高天原を追放された時に着せられたもので、オニや罪人の象徴でもあります。

スサノオの故事から、人の家を訪れる際には蓑笠を着ない慣わしが伝わっていることを書記は伝えます。

また、同じく書記には田主丸に近い朝倉山の上で斉明天皇の葬列を見ていた鬼は大笠を着ていたという記述があります。私はこの鬼は大化の改新で殺された蘇我馬子の霊だと考えますが、この笠が河童の頭の皿につながります。

土佐の「ぜぜがこう」（瀬々河候か？）という童歌に

「向河原で土器（かわらけ）焼けば いつさら むさら ななさら（中略）これこそ鬼よ 蓑着て笠着て来るものが鬼よ」という歌詞があります。

「かかし」は河童であり、スサノオであり、鬼なのです。

田主丸を含む筑後地方の河童にはまた、平家の怨霊という面も持っています。これは平家落人伝説と結びついて広まっているようであり、これも滅ぼされた勢力が河童であるということになります。

場所は変わりますが高知や長崎ではスイテングという呼称の河童がいるそうですが、スイテング＝水天狗＝水天宮でもあります。水天宮は海事の神様ですし、平家と共に海中に没した安徳天皇を祀るところが多いといえます。そして全国の水天宮の頂点は筑後の久留米水天宮なのです。

その久留米に筑後一宮の高良大社（こうらたいしゃ）があります。田主丸からは車で20分ほどでしょうか。祭神を高良玉垂命（コウラタマタルノミコト）といいますが、その正体が不明で諸説あり、論争になっている所に特徴があります。

武内宿禰説、藤大臣説、月神説などなど。

武内宿禰とは蘇我氏の祖とされる人物です。

また、藤大臣とは藤原氏のことですが、ここで話を唐突に東北に飛ばすと奇妙な類似点があります。東北で有名な妖怪に座敷童子（ざしきわらし）というものがあります。これも、水中から来たモノという出自を持ち、童子形をして、枕返しをしたり、寝ている人を起こして相撲をとったりするという、河童の性質を持っています。

岩手県の金田一というマチに座敷童子が出現することで有名な「緑風荘」という旅館が

あります。（先日おいしいことに火災で焼けてしまいました。）この座敷童子には本名があり「藤原朝臣亀麻呂」ということです。また、座敷童子のような童子の髪形を「おかっぱ頭」と呼びますが、おかっぱ＝お河童です。

月神はいうまでもなくスサノオの兄神ツクヨミにあたります。

さらにこの高良大社は境内に愛宕神社があり、下社に祇園社があります。

この高良大社の祭礼に6月1日の川渡祭り（別名へこかき祭り）があります。

ふんどし一本の男達が川を渡り、社殿前の大きな芽の輪をくぐるというもので、牛頭天王＝スサノオの「蘇民将来」神事と同じです。

高良大社の神紋は横木瓜（よこもっこう）です。木瓜紋は京都の八坂神社（祇園社）の紋でもあり、キュウリを輪切りにしたようなデザインです。木瓜とは「ボケ」のことですが、字をそのまま読めば「きうり」になります。河童がキュウリを好むことと繋がっています。

そして高良（こうら）はそのまま甲羅になります。河童は甲羅を持つことで亀と同じで、だからこそ座敷童子の名も「亀麻呂」となるわけです。

さらに亀はカメ＝甕、すなわち土器でもあります。土佐の河原で土器（かわらけ）を焼くと蓑笠をつけた鬼が現れる話は前述しましたが、これらの土器や、河童が貸し与える膳椀の木器。それらを作る木師（きじ）や土師（はじ）は山の民であり、河童の眷族なのです。

この「土師」を姓（かばね）としてあたえられたのが野見宿禰（のみのすくね）という人物です。王族が死んだ時、殉死の代わりに埴輪を埋めることをはじめて提言し、その功により埴輪を作ったり、墳墓を作ったりする特権を与えられたと書記にあります。そして同時に相撲の祖であるともされています。だからこそ「土師」の眷族である河童に、土木工事をしたり、相撲を取ったりする性格が後付けされたのです。

野見宿禰の子孫に菅原道真がいます。道真はスサノオ同様政治的敗者となり、大宰府の地で没します。筑後地方には河童とこの菅原道真との関連を語る話もあります。川に入る際「いにしへの約束せしを忘るなよ川だち男氏は菅原」という句を唱えると河童の害にあわないというものです。不思議な伝承ですが、菅原道真はこの後茨城編でも不思議なところで登場します。

木師や土師が使う轆轤（ろくろ）。それはくるくると回ることで渦を表します。

くるくると車のように廻る＝くるめく、久留米の語源です。今はめくるめくという言葉に残っています。河童に関わる事象はそれぞれが関連を持ちながら渦を巻いているようです。

茨城編

茨城編をはじめると、さきに「みずち」系統の河童について触れたいと思います。

青森や岩手、つまり旧南部領で「メドチ」といいます。そのほか「メットウチ」「ミズシ」「メドツ」と呼ぶ地方もあります。おもに北日本、東日本に多く北海道のアイヌ民族にも「ミンツチ」という呼称があり、手が抜けるという河童と共通した特徴を持つことを柳田國男が書いています。また、鹿児島島の「ミツドン」もこの系統とする説もあります。

これらは「ミズチ（虬）」と古語にいう水龍のことで、河童というより、角のある蛇のよなものであることが多いようです。

「ツチ」「ツツ」「カカ」などは古語で蛇を表すので「ミズツチ」が変化したものと思われます。ミズチは日本書紀の仁徳記にあらわれます。

今回は河童の共通項目にこれも加えることにします。

さて茨城は牛久沼や小川芋銭をはじめ河童の話題に事欠かない土地ですが、田主丸との関連からまずはやはり案山子の話です。

日立市にある大甕（おおみか）の地に、むかし天香香背男（アメノカカセオ）別名天津甕星（アマツミカボシ）という星の悪神が支配して、大いに災いを成したといわれています。

カカセオは案山子男でありましょう。また、前述のように「カカ」が蛇を表すとするとカカ子（かかし）は蛇体を持つことになります。案山子が一本足なのは身体自体が一本である蛇体を表しているのかもしれませんが。さらに甕（ミカ）は土で作った瓶（カメ）であり、土師の造る物であることは田主丸編で述べました。古代常陸（ひたち）を支配し、天孫族（ヤマト朝廷）に立ち向かったのも案山子であり河童なのです。

行方市玉造町芹沢の手奪橋（てばいばし）というところに河童伝承が残っています。

昔、芹沢の領主が巡視の帰りに橋のたもとで騎馬の脚を河童に捕られ、河中に引きずり込まれそうになったのを、持っていた刀でその手を斬りおとしたところ、あとでその河童が、秘伝の傷薬と交換にその手を返してくれと懇願したという「駒引き」伝説です。

幕末、京都で近藤勇と共に新選組を結成し、のちにその近藤一派に暗殺された芹沢鴨はこの領主の子孫ということです。芹沢家には「筋渡し」という、河童の秘薬が伝えられ、財を成したといわれています。

友人のS氏の住む小美玉市小川町にも、上記の河童を祀った手接（てつなぎ）神社があります。手や腕の病に霊験があると伝えられています。

古来茨城県には多くの「怪しきモノ」の記録が常陸国風土記によって残されています。

国巢（くず）、山の佐伯（さえき）、野の佐伯という穴居民がいたと記録されています。

狼の性、梟の情を持ち、鼠の如く掠め盗むとあります。国巢はまたの名を土蜘蛛、八東

脛（やつかはぎ）ともいいました。

国巢は国栖とも書き、書記によれば吉野（奈良県）や九州にもその記載があります。

土蜘蛛も穴居民や妖怪として各地に伝承を残しています。蜘蛛と比喻されるように手足の長い民のようで、脛の長さが八束、すなわち八握りもあるとされる「やつかはぎ」と同意です。

足が長いという意味では神武神話における「長髓彦 ながすねひこ」も同族でしょう。

彼は大和の生駒郡に割拠した土族の長で、天皇に抵抗し、やがて天孫族であり、義父でもあったニギハヤヒに討たれました。

また、スサノオの義父母となる出雲の「テナヅチ・アシナヅチ（手名椎・足名椎）」も、手足の長い者とも、手足のない蛇身の者ともいわれています。手足が長いというのなら土蜘蛛の眷族ということになり、手足がないのであればミズチの眷族ということになります。

また北陸や長野には「手長足長」という巨体の妖怪・山の神の話が伝えられています。

さらに常陸国風土記の行方郡記には夜刀（やと）という神の記載があります。この神も蛇身で、頭に角があったといえますからそのままミズチ（虬）です。

これらの異民たちは打ち殺されたり、穴に落とされて殺されたり、宴会を催して油断させたところで焼き殺されたりして滅ぼされてゆきます。わずかに生き残った者、朝廷に服従した者だけが水辺にのみ生きることを許され、河童と呼ばれる者となって差別の対象になっていったと考えることができます。

さて、茨城において朝廷に逆らったものとして平将門を外すわけにいきません。

平将門は平安中期の人で、常陸の国府襲撃を出発点として、上野・下野をも陥落させ、猿島（現茨城県坂東市）に居館を置き、文部百官を定め自らを新皇と称しました。しかし、最後は朝廷軍により討たれた中世のヒーローともいえる武将です。

将門と河童を直接に結びつけるものは見つけられませんが、間接的な事柄は多々あります。

まず、将門が新皇を名乗ったのは神のお告げだとされています。巫女に乗り移った八幡神が「天皇の位を将門に授ける」と言ったのです。そしてこのご神託に連署したのは菅原道真の霊だということです。道真と河童の関わりは田主丸編で述べました。

また、将門は道真の生まれ変わりであると信じられていたとする説もあります。道真の没年と将門の生年が同じで、わずか3カ月しか離れていないことから来る伝説です。

しかしこれは単に伝説の域にとどまりません。実は道真の子兼茂は、将門が平氏一族と戦っていたころの常陸之介だったのです。兼茂と将門の間に何らかの接触があった事が、のちに道真伝説になった可能性も考えられます。

平将門を祀って有名なのが東京の神田明神です。しかし、ここの祭神は将門だけではありません。大己貴（オオナムチ）＝大国主と、明治になってから茨城の大洗磯前神社から勧請された少彦名（スクナビコナ）でもあるのです。

さらに東京の大手町にはこれも有名な将門の首塚があります。この首塚の周りには不思議なことに蛙の石像がたくさん置かれています。「無事帰る」にかけて、海外勤務の商社マンなどが信心しているといえます。実際一番大きな蛙はフィリピンで誘拐され、そのご無事に釈放された元三井物産マニラ支店長の若王子氏の寄進によるものだそうです。

田主丸編でも触れましたが、蛙はカワズ（河衆）であり、河童と同一視できますし、蛙の一族のヒキガエルはスクナビコナの話に関わっています。

そして将門の本拠地は筑波山の麓です。筑波山と言えば「ガマの油」が有名です。このガマこそ、案山子を仲介したヒキガエルそのものですし「ガマの油」の正体は傷薬です。河童が薬をもたらす話とどこかで結びついていそうです。また、傷薬の薬効としては「ガマ」は蝦蟇蛙の油ではなく、植物のガマ（蒲）の花粉である可能性も非常に高いのです。蒲の穂で傷を治す。これはスサノオの子孫にして神田明神の神、オオクニヌシが因幡の白ウサギに伝授した治療法そのものではありませんか。

また、歌舞伎の世界において将門の娘というものが登場します。五月姫という名の将門の三女は、父の復讐のため妖術を取得し、滝夜叉姫という蝦蟇使いになったというものです。芝居では舞台上に巨大なガマが登場します。

以上みて来たように、将門も、オオクニヌシやカカセオや菅原道真と同じく、国家権力に敗れていった者なのです。河童とは政治的敗者の化身でもあるのだと考えます。

次稿では、前掲した「田螺殿の歌」をはじめとして、なぜ河童は医薬と結びつくのかを通して、河童のもう一つの正体に迫りたいと思います。